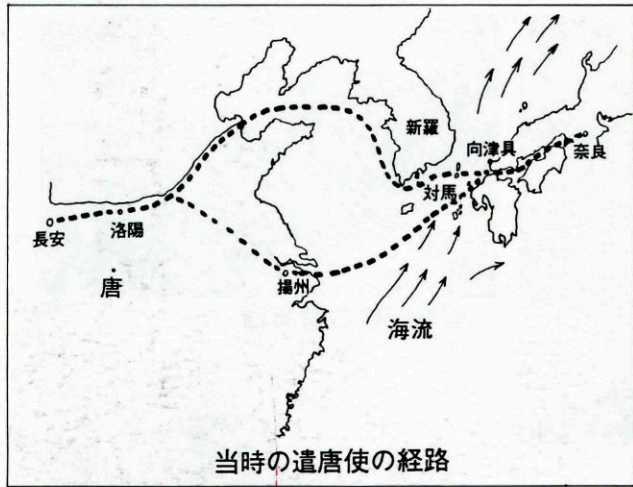


# 楊貴妃の里特集

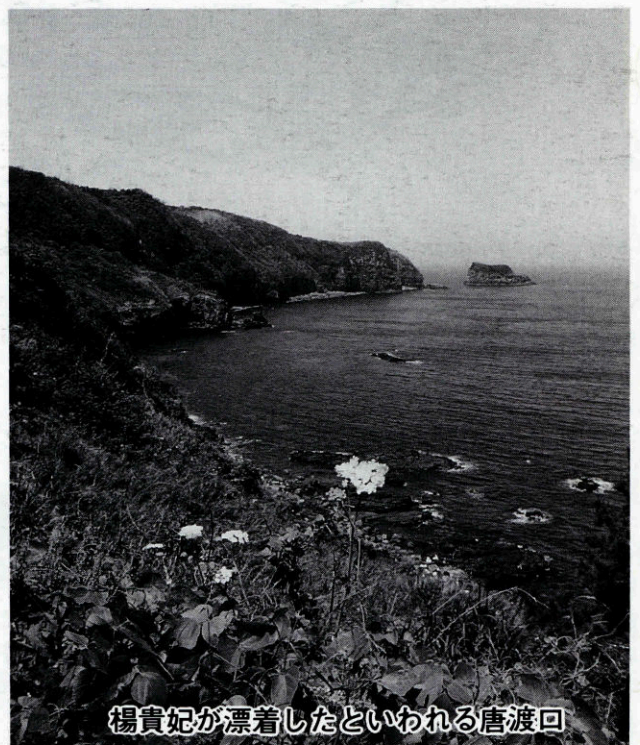


当時の遣唐使の経路

ならべて、玄宗の累代の忠義あるすぐれた家臣を殺し、時が来るのを待っていた。  
 唐の天宝十五年（西暦七五六年）六月十三日の朝、謀反を起こした安祿山の軍勢が長安に迫っているという報告を受けた玄宗は、楊貴妃の兄、楊国忠の策をききいれ成都（今の四川省）をめざして落ちのびた。しかし、一行が馬嵬駅まで来ると、随行の兵士たちは飢えと疲労とで急に反抗し、安祿山の乱はひとえに状勢を把握していなかった楊国忠のせいであると叫び、ついに殺してしまった。楊貴妃の姉たちも次々に殺され、もはや玄宗の言葉もきかぬ状態に

陥ってしまった。そして、ついに指揮官である陳玄礼は、玄宗に楊貴妃の命もいただきたいと陳情したのである。玄宗も事態がこうなつては、とても救うことができぬと悟り、楊貴妃がつれて行かれるのを見守るしかなかった。楊貴妃は近くの仏堂の中で絞め殺され、玄宗はなすすべもなく、泣く泣く成都へ落ちのび、歲月を空しく過ごすこととなった。  
 ところが実は、陳玄礼は玄宗があまりに悲嘆にくれているのを見て涙を流し、楊貴妃も嘆願するので、仏堂前で身代わりの侍女を殺させ、楊貴妃を空艫船に乗せ、数日の食糧といっしょに流したのであった。

ある書には、仙境に入つて仙女になつたと書いてあるのだが、実は向津具の唐渡口に漂着していたのである。しかし、楊貴妃はまもなく死に、その死を悼んだ里人は、久津の二尊院に手厚く葬つた。楊貴妃のことを忘れることなく想い続けていた玄宗は、夢枕で彼女の死を知り、阿弥陀如来と釈迦如来と十三重の大宝塔



楊貴妃が漂着したといわれる唐渡口

を、家来の陳安に持たせ日本へ遣わせた。陳安は楊貴妃の漂着した場所を尋ね歩いたが、ついに見つからず、やむなく京都の清涼寺に二尊仏を預けて帰った。後に漂着地が久津とわかつたのだが、清涼寺も二尊仏のおかげで栄えていたので手放すことを拒んだ。そのかわり、当時の名工にまったく同じ仏像を彫らせ、新旧一体づつを二尊院とのあいだでわけて安置することとなった。

これが、久津二尊院に伝わる楊貴妃についての伝承のあらましです。また、昭和六十一年の香港の権威ある新聞に

「楊貴妃は安祿山の乱で殺されたのではなく、日本へ逃れた」という新説が発表されたことから、改めて二尊院の伝承が注目されることとなりました。その二年後、昭和六十三年には中国日本大使館の章金樹参事官（当時）が油谷町を訪問されています。真実はともかく、この伝承は今後も語り継がれ、ひとびとを歴史のロマンに導いてくれることでしょう。

そして、六月十五日（火）、二十一世紀へのまちづくりの夢をそそいだ「楊貴妃の里」がオープンします。